

白紙還元の御詔

十六年十月十六日近衛内閣は瓦解し、その後には東條英機内閣ができません。世間一般では東條内閣のような軍部内閣ができたから戦争になったと言いますが、そうではありません。東條大将は天皇陛下から大命を拝受した時に、陛下から「九月六日の御前会議における決定は白紙に戻して考え直せ」との御言葉を戴きます。「十月上旬までに交渉がまとまらない場合は対米英戦争を決意する」を削除し、あくまでも外交交渉を押し進めよ、との御言葉を賜るのです。これを「白紙還元の御詔」と言います。

これを知ったアメリカの大使グルーは、本国に電報を打ちます。「今こそ日本と和を結ぶチャンスである」と。イギリスのクレギー大使も「日本は本当に平和を望んでいるから、今こそ和を結ぶべきである」と本国に打電します。しかしすでに戦いを決意しているルーズベルトもチャーチルも、そのような電報は無視して、戦争準備を内々に進めるのです。

このように外交交渉に努力している間にも、石油は禁輸となり、九月二十七日には鉄鉱石・石炭・錫・銅といった軍需品が輸入できなくなり、このまま行けばシリ貧です。経済はダメになり、日本はつぶれます。戦わずして日本は滅びるのです。敵の言う通りに尻尾を振って降参するか、それとも決然と立って戦うかという、二つに一つの議論が起こります。それまでは平和を唱えていた海軍が、もう立ち上がってやらなければ自滅だと決意します。それは日本が備蓄している石油は平時で二年分、戦時では一年分もないからです。石油がなくなったら、それこそ手を上げるしかないわけです。それほど石油禁輸は日本にとっては絶体絶命だったのです。